
猫と鳩

黒轍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫と鴉

【Zコード】

Z2815F

【作者名】

黒轍

【あらすじ】

裏切りやら因縁やら友情やら。複雑な過去を持つ門珈は、入学して一ヶ月も経っていないのに、いきなり親の都合で転校される。しかも転入先レイルズ学院は今「激動の時代」だとか。片や馬鹿率いる「猫」。片や活字中毒率いる「鴉」。様々な組織の入り乱れる学園でのお話。

第一部／序章・破壊の電波（前書き）

手探り＆燕かなりあ優先で書いてるので亀足な予感です。

第一部／序章・破壊の電波

「あれ？帰つて来てたの？はるな

風印から戻つてきて早々、清水門^{しみずもん}迦^かは呟いた。

一段ベッドで分断された六畳間は、電気を消したはずなのに明るく、鍵もかけたはずなのにかかりていなかつた。

左側の空間で勉強らしきものをしていた少女が振り返る。強くパー^マをかけた黒髪、一見きつそうな緑色の目。やつぱりルームメイトの風間遥南^{かざまはるな}だ。

今日は中学のときの友達の家に泊まりに行くと言つていたのに、びつしてだらう。

不思議そうに見てこると、遙南はにやりと笑んだ。

「もかが寂しがるから

一瞬はるなに抱きつきたくなる衝動に駆られた。でもそんなものは無視して、門^{かど}は笑つ。

「はは、ばーか

合わせてはるなもけらけらと笑つた。

どこまで知つているのかわからないその態度に、びつじゆつもなぐ救われた。

足を上げて靴を脱いで、裸足で右側の空間に進んだ。

机の上で黒い携帯電話のライトが、派手な「ノーナンセンス」を避けて点滅している。

タイミング良く、右側からも声がかかった。

「携帯、ずっと鳴ってたよ」

「え?」

「おまえその着メロまじやめてくんない? 煩すぞ」

「やだよ。これはあたしの魂デス」

「おまえの魂つるせえ」

「うわ、何かむりゅあたし自身を否定された気分」

軽口を呟き合しながらも、ぱーっと携帯を開いた。

げー。

声には出でずとも呻く。

着信履歴には「母」の文字。

やだな。どうせまた小言だよ。

でもあたしの学校入ってからは、そんな田立つたことしてないんだけどな。

母が自分に電話をかけてきたら、まず悪いことに決まっている。

正直、かけたくない。

でもかけなかつたとして、また向ひからかかつてくるだけである。

それすら無視したら?

そうしたら自分は、今度こそ本当に見捨てられるかもしねない。

仕送りを止められたことだけは避けたかった。

向こう側の遙南に聞こえないよう、小さく息を吐いた。
そしてベッドの下段に、仰向けにして寝転がる。

下段にだけは、遙南側にカーテンがしてあって、見えないようになっていた。とは言つても二人を隔てるのは布一枚。声は丸聞こえだろ。

まあいいや、と、あらゆることに観念した門珈は、投げやりに発信ボタンを押した。

5 フル程で、相手に繋がる。

『もしもしし?』

ぶつきめうで、苛立つような女声。

途端に電源を切りたくなる。

でもこじちはこっちで、精一杯の虚勢を張つてやるつもりだった。相手を真似して、最大限にぶつきめうな声で応答してやる。

「何か用?」

声が震えたのは、ばれたかな。

しかしそんなちっぽけな門珈の虚勢は、次の瞬間脆く崩れ去った。躊躇うことなく、門珈に覚悟する余裕を与える隙なく、電波は音を突き刺す。

『あんた、転校することになつたから』

第一章・激動の学院

理由も特に告げられないまま、ただ三日後レイルズ学院に転校だと、そう言われた。資料は後で送る、とも。
でも資料に目を通したときぴんときた。

「全寮制」「七年制」の文字に。

それはつまり、七年間は放置しておけるということだ。そして七年経つたときは、門珈もいい加減自立していい時期だ。こうして関わりを断つことができるとでも考えたのだろう。

そんなことで転校まで、と、普通の人なら疑問に思うかもしだい。

でも、あの母親ならば有り得るのだ。

そうなると、昨日の電話は、もしかしたら母親と言葉を交わす最後の機会だったのかもしれない。

無論、残念だなどとは欠片も思わない。

でも、転校はやっぱりやだな。

前の学校では、門珈もそれなりに上手くやっていてたし、大した問題も起こさず、平穀に暮らしていたのだ。遙南のような貴重な友達も何人かできていた。折角仲良くなれた友人と早々に別れるのは、やっぱり辛い。

それに、である。

転入先の学校には、門珈の天敵がいるのである。

折角母の縁が切れたかもしれないのに、敵の縁のほうはまた繋がってしまった。

母の縁と敵の縁、どっちかひとつ切れるとしたら、自分はどうちを選ぶだろう。

そんな不毛なことを考えて、結局不毛なことだと結論づけた。

小さく息を吐くと、田の前にそびえる校舎群に田をやつた。

平坦な土地に美しく生い茂る林の中、それは一つの都市のようこそ存在している。

いや、実際「都市」というのも間違つてはいないだろ？。学級は一学年につき二十程あり、校舎も一学年ごとに分かれている、と資料には書いてあつた。学院内には商店街などもあるらしい。

前居た学校も小さくなかったが、クラス数はこの半分くらいだつたし、全寮制ではなかつたし、そもそも普通の高等学校だつたので三学年までしかなかつた。

驚きといえば、こんな辺境の地に建てられているにも驚きだ。何せ近くの小さな街「柏」^{かしわ}を出て、バスで三十分だ。林に入つてから十五分、一件の建物も見ていない。

しかしこれについては理由があつた。

このレイルズ学院は、二つの国「クラウディア王国」と、「白鷺自由部族国家」の平和の象徴として存在している（ちなみに門珈は白鷺の出である）。

とはいっても公立ではなく、立派な私立である。高名な科学者ハルディ・レイルズ氏と、その妻・若崎奏氏^{わかさきかな}が創立したらしい。

そして両国の和平を強調するため、二つの国の境界線の真上周辺の土地を買い、そこに建てたのだ。

だからこんなに何もないとこに建つてているのだと、資料は示していた。

ちなみに両国から、またあらゆる部族・人種から平均的に生徒を取つてゐる、という点でも、国際的関係を強調してゐるらしい。

そういう面で言えば、門珈は少し安心してゐた。

色々なところから生徒を取つてゐるのだから、門珈の属する東風族の生徒も、自然と数が限られてくる。

前の学校は普通に東風族公立だつた。それはつまり、ほぼ皆が門
珈の中学時代を知つてゐることを意味する。

避けられたり、敵意を持たれたり、なかなか友達ができなかつた
り。

これでも結構苦労していたのだ。

だから、だいじょぶ。前よりは状況がまじじゃんか、清水門珈。
そう思うことにして、自分を励ます。
ぱしりと頬を叩くと、門珈は意を決して校門へ歩き出した。

* * * * *

がらがらとトランクを転がしながら、門を抜ける。

その直後、後ろから声がした。

「清水門珈さん？」

爽やかな青年の声に呼び止められ、振り返る。

黒いスーツを着た、眼鏡の男が立っていた。

見慣れない恰好である。

音族たよりの男の服に似ているが、何となく大人し過ぎる氣もする。も
しかしてクラウディアの人だろうか。

勿論門珈はこんな人間知らない。

門珈が不思議そうに突つ立つてゐると、男のほうから近付いてき
た。

「清水さん、ですよね」

上品で綺麗な物腰だ。

「あ、はい」

肯定の返事に、男の銀色の目が細まり、微笑んだ。
目と同色の髪が風になびく。
綺麗な人だなあ、と心の中で呟いた。
でも女性的な美しさではなく、女の子達がきゅーきゅー騒ぐところの「かっこいい人」にも当てはまる。
要は、門珈の第一印象は、「何かモテそう」だったといふことである。

男は穏やかに会釈した。

「初めまして。ソラと申します」

ソラ？

姓はないのだろうか。
だとしたら十六夜族じゅうろくやぞくという可能性もある。
でも十六夜族の人は日光が苦手だったはず。
特に重装備というわけでもないし、こんな悠長ゆうちょう、青空あおぞらの下、身を晒していいのかなあ。

心配そうにソラの服を見ていると、彼は苦笑した。

「このよつな服を見るのは初めてですか？」
「んー、似たよつなのは見たことがあるけど、まあ初めてかも」

そうでしたか、と頷くソラ。

「俺はアルバートの民です。中学はコイルのほうに行っていましたが」

『アルバート』、『コイル』……。聞いたことはある。やはり彼はクラウディアの人間だったらしい。

「今日はあなたを寮まで案内するよう、頼まれてるんです。ちなみに同じ七組の者ですよ。よろしくお願ひします」

「あ、うん、よろしく」

同じクラスだと聞かされて、門珈は元気良く頭を下げた。

ほら、第一印象つて大事だし。

それにして、もつと年上の人間だと思っていた。こんな人が同じ年だなんて、世の中って広いなあ。

「荷物、お持ちしましょつか？」

わお、紳士的。

「ううん、だいじょぶ

「そうですか、じゃあ鴉寮からす……元い女子寮に案内しますので、付いて来てください」

……何か今聞き慣れない単語が混じったような……。

「からすじょぶ？」

苦笑するソラ。

「まあ、どちらにせよ説明するつもりでしたがね。清水さん、この学校について、猫と鴉の話はお聞きになりましたか？」

首を横に振る。

見学に来る暇すら無かつたのだ。
持っている情報といえば資料にあつた基礎的なものだけだし、猫や鴉なんて文字は全く記憶にない。

ソラは微笑んだまま言った。

「今、この学校は激動の時代なんですよ

言つてゐる意味が全くわからない。

「あるところに一人の男子生徒がいましてね。一人はアザウェイ、もう一人はゼブラといいます」

随分と話がよく飛ぶなあ。

門珈は半ば呆れながらも、黙つて聞いていた。

「二人は寮で同じ部屋になつたんですが、これが物凄く相性の悪い二人組でして。ついに喧嘩勃発。アザウェイは思いました。『あいつは敵だ』と。そこで彼は打倒ゼブラを目標とする集団『猫』を作りました」

何だか段々話があかしい方向に向かつてゐる。

「わりと人は集まつたんです。彼の友人にはリーダーも何人かいましたから」

『リーダー』とは、一つの部族、または民の代表である。代表どうしで話し合いや交流の機会などを設けて、それぞれのグループの親睦を図るのが目的らしい。

「でもそなうなるとゼブラも黙つてはいませんでした。彼は宣言しました。『猫』以外の人間を『鴉』とする」と

「セニッ」

思わず言つてしまつた言葉に、はつとして口をつぐむ。ソラがこつちを見てにやりと笑つた。

「そう、セニイ方法です。でも、確かに効果的ではありました。鴉に属することを嫌い、猫に入る生徒もいましたが、結果的には大勢の者が鴉につきました。そもそも猫はあまり素行の良くない者が結構いましてね、それに反感を持つ生徒は喜んで鴉につく程です。こうしてレイルズ学院の一年は、今真つ二つに分かれているんです。それに伴い寮も分かれました。元々相性の悪い二人が相部屋になつたのが原因ですね。今では男子寮を猫が、女子寮を鴉が使うようになっています。鴉のほうは人数も多いですし、微妙に男子寮も使つてますが」

「へ、へー」

何か、そこはかとなくデジヤ・ウ、ユが。

「清水さんの中学に、状況は似ているかもしませんね」

咳き込んだ。

とりあえず氣を落ち着ける。

「な、なして？」

「鷹組といた……」

「ストップストップストップ！！」

みなまで言わせず、叫んだ。

「何で君がそれ知つてんの！？クラウディア人なんじょー！？」

ソラは門珈の剣幕にも氣圧されることなく、穏やかなまま言つ。
「俺の知り合いに、あなたのことをよく知つている人物がいるんです」

その言葉に寒気を感じたが、それが誰なのか聞く勇気はなかつた。どーかどーかあたしの想像している人間じゃありませんよーにつ！

「もしかして東風族以外のみんなも、あたしのこと知つてたりする？」

恐る恐る聞いてみた。

「知つている人はいるでしょうけど、少數でしょうね」

ほつとして肩を降ろした。
本当に良かつた。

それにしても、自分の過去を知つてもこうして氣にせず接していくのだから、きっとこの人も悪い人ではないんだろう。

しかし門珈が少し気を許しかけた途端、ソラは振り向いてこいつ言った。

「そんな清水さんだからこそ、折り入つて相談があるんです」

僅かに身構える門珈。

ま、まさか気に入らない先公を飛ばしてくれだとか金曜日を休みにしてくれだとか言うんじゃないでしょうね。」

「実は東風族には、リーダーがまだいないんです」

少しづれている門珈の思考とは裏腹に、ソラは説明を始める。

「リーダーの決め方は部族、人種」とに違うんですが、東風族の場合は立候補した生徒に反対な場合は、反対票を入れ、特に異論がない場合は何もしないという方法だったんですね」

「うわ、東風族やる気ねー。まあらしいっちゃらしいけど。

「それで、今回立候補したのは一人だったんです。しかし、反対票の数が多くきました。反対票が三分の一以上あつては駄目なんですよ。こうしてその生徒は不信任となりました。誰だかわかりますか？」

手を振り頭を振り、全身で否定を主張した。

「いや、知らんです。教えてくれなくてもいい데ス」

ソラは苦笑して続ける。

「それ以降立候補は上がらず、今に至っているといつわけです。生徒会のほうでもそろそろ対策を考えねばと思つていたところなんですか？」
俺一年の副会長なんですよ

「あ、そつなんだ」

生徒会にあまり良い思い出の無い門珈には、曖昧に笑うことしかできなかつた。

「で、そんなとき、あなたが来ることになつた」

ふいに立ち止まつたソラは、改めて門珈に向き直り、つられて門珈も立ち止まつた。

「清水さん。猫に入つて東風族のリーダーになつてくれませんか？」

第二章・決意と衝撃

少なからず驚いた。

「君、猫なの？」

ええ、と、ソラは頷く。

「さりに言えば猫の幹部で、アルバートの民のリーダーです」

副会長で幹部でリーダー。何だか凄い人に捕まってしまった。

「別に猫という組織そのものが、荒くれ集団というわけではありますよ。ただ、少し困つた方が比較的多いということですね」

「幹部とか、あるんだ」

「はい。猫は団長が一人、幹部が三人。鴉は頭領一人に幹部四人で成り立つてます」

「へー。『頭領』のほうが何かかつこいいね」

ソラは小さく笑う。

「アザウエイも悔しがってました。今更真似もできないみたいですが。幹部の人数も、あなたが入つてリーダーになつてくれれば四人になるんですけどね」

言つて再び歩き出したので、門珈もそれに倣う。

「幹部つて、リーダーがなるものなの？」

「そういうわけでもありませんよ。結果的にリーダーの場合が多く

はありますがね。ただ、あなたがリーダーになつた暁には、幹部入りは確実でしょ」といふことです

ふうん、と相槌を打つておく。

何にせよ、門珈にとつては気乗りのしない話であった。

何が一番イヤかといえば、結局誰かの下につかなければいけない、といふことである。

猫じゃなければ鴉、鴉じゃなければ猫。

うーん、微妙な学校に来ちゃったかも。

幹部にならうがリーダーにならうが、最終的には団長と頭領という二人がいる。それは門珈にとつて、あまり気持ちの良いものではなかつた。

「ういうときにはあれかな、「下克上」ってやつ。

「焦つて考えるものでもありませんけど、是非頭の隅にはとどめていただきたいものです。ああでも、猫になるか鴉になるかは早急に決めたほうがいいと思ひますよ」

思い切つて門珈は言った。

「ねえ、それ以外はないの?」「それ以外?」

不思議そうなソラの声。

「猫でもなく、鴉でもない、それ以外」

僅かな沈黙が流れる。

聞こえなかつたのかもと思い、言い直そくどうか迷つてみると、涼しげなソラの声がするすると耳に入つてきた。

「面白こと」とを言いますね。ですが……」

ソラはいたむらを見ることなく続ける。

「そのときは相手になりますよ、俺が」

その言葉に言い知れぬ悪寒を感じて、門珈はこの学校に来てしまつたことを盛大に後悔し出した。

* * * * *

規則的に並んだ扉を、ちらちらと確認しながら進む。

鴉寮の一階。探ししているのは219の文字だ。

学校側としてはやはり一応女子寮男子寮として扱っているようですが、そうなると門珈がまず鴉寮になるのは当然のことだった。

ソラとは寮の前で別れた。猫のソラが中に入ることはできないらしい。

寮に入つてからは上履きらしく、門珈はとりあえずそこら辺にあつたスリッパを履いている。

寮内に人気はあまりなく、一階に入つてからは誰にも会つていない。ただ部屋の中からは時々声が聞こえた。誰もいないというわけではなさそうだ。

それでも静かな空間にはスリッパの床を擦る音がやけに大きく感じられ、まるで世界に一人だけのような気分だ。

思つてしまつて、門珈は身を震わせた。

やがてひとつ扉の前で立ち止まつた。

赤紫色のドアには、金色で219と書いてある。間違いない。

確か門珈は、もう一人の女生徒と相部屋のはずだ。

門珈は誰かがいてくれることを願いつつ、ドアをノックした。向こう側から「はーい」と声がした。

ひとまず安堵する。

扉を開けて姿を現したのは、賢そうな緑色の目を持つ少女だった。透けるような白金髪は一ヶ所だけ編まれ、羽飾りがついている。着ているのは裾に刺繡が施された赤いドレープワンピース。羽飾りも刺繡も、水夫族の典型的なファッションドだ。

「あ、えと、初めまして。今日からこの部屋に住まさせていただく、清水門珈でっす」

少女は愛らしく微笑んだ。

「わたしは飛場史弦。^{ひばじげん} よろしく」

つられて門珈も笑顔になる。

二人の間には、暫くほんわかとした空気が流れた。

ふいに、史弦が門珈の黒地に白い水玉柄のトランクを指差す。

「あなたの荷物はそれだけなの？」

「あ、ううん。残りは明日来るの。急な転校だから、凄いばたばたしちゃつてて」

「なんだ、と史弦は頷く。

そして体を横にして、門珈が入れるようにしてくれた。

「とりあえず上がんなさいよ。こんなところで立ち話も何だし」

「あ、うん、ありがと。お邪魔しまーす」

広さも配置も、前の学校とほほ変わらない。六畳くらいの空間を、一段ベッドが分断している形だ。

「今はわたしが右のほうとベッドの下使つてゐるんだけど、嫌だつたら言つて。わたしは別にどっちでもいいから」

「あたしも気にしないからだいじょぶだよ」

明るく言つて、門珈は左のほうに進んだ。

「あ、ていうか……」

はたと史弦が口に手を当てる。

「もしかして、さつあと引つ越す予定があつたりする？」

田を瞬しばたかせる門珈。

「え？ なして？」

「あ、えっと、鴉と猫の話は聞いた？」

そう問われて、理解する。

確かに自分が猫になつたなら、早々に引つ越すことになるだろう。

「引っ越し気は、今のところ無いかな」

「あり、そつなの」

そう言つて史弦の態度は少し驚いているふうではあつたが、別段何とも思つていないようだ。彼女は、猫にならうとはしなかつた故に、最終的に鴉になつた類たぐいなのかもしれない。

しかし次の史弦の言葉に、門珈は彼女の性格がわからなくなる。

「あたし的に言わせてもううと、猫をお勧めしておくれ」

血ひの耳を疑う門珈。

「へ？ 何で？」

史弦は鴉なのに、何で猫を勧めるの？

史弦は腕を組んで、哀れむように門珈を見た。

「あなたのクラス、あなた以外全員猫よ」

「な、っ……！」

「しかも、猫の団長と幹部三人、全部七組に収まつてゐる。平和な学校生活を送りたいなら、猫入りは必須条件じやない？」

むー、と唸り、唇を噛む門珈。

確かに、ここで猫にならなかつたら、異端視されそつだ。でもここで猫になつたとしたら、結局色々なものに屈したことになる。

それはもつと嫌だつた。

「平和な学校生活を、望んでいないとすれば……？」

挑戦的な笑みを口元に浮かべてみる。
史弦はきょとんとした。

「なあに、あなた。鴉派なの？」

門珈はぶるんぶるんと首を横に振った。

「違う違うーあたしは他人に屈するのが大嫌いなのー！」

史弦は呆気に取られた顔で門珈を暫く見つめる。それから小さく噴き出した。

「やつだあんたー言つてることがアザウエイに似過ぎて困っちゃうー！」

ぽかんとする門珈。

アザウエイって猫団長だつていうあの？ぐだらないことが発端で一学年全部を巻き込む、聞いた限り馬鹿としか言えないような人間とあたしが『似過ぎ』だつて？

「じ、冗談やめてよー！」

かつとなつて叫んだ。

でも史弦はまだ笑っている。

「あらあなた、もうアザウエイと会つたの？」

「いや、会つてないけどさ」

「なんだ。じゃあそんなに怒ることないじゃない」

「だつて、話聞いた限りじゃ、そのアザウエイって人馬鹿としか思えないんだもん」

頬を膨らませ、拗ねる門珈。

「ふふ、結構失礼なこと言つたのねー。まあいいわ。それで、じゃああなたはどうしたいわけ？猫にならないんであれば、必然的に鶉に

なつちやうけい

そこじが問題なんだよね、と門珈は顔をしかめてみせる。

「まあでも、そちら辺は仕方ないよね。暫く我慢してみせるよ」「我慢して、どうするの?」

何だか史弦は随分と楽しそうである。
門珈はにやりと笑った。

「我慢して、東風族のリーダーになつて、新派を作る」

言つてから、心の中で自嘲した。

あつれー？あたしつてば、「一ーゆー」とからは足洗つたんじゃなかつたつけ？
でも不思議と、血が騒ぐんだよねつ。

史弦は呆れ顔だった。

「何だ、あなたも負けず劣らず馬鹿じやない

ぱつさつと切つて捨てられる。

まあ、確かに言われてみればそうなのかもしない。いや、頭が常人よりちょっと悪いのは自覚してるけどさ。

でも、と言つて、史弦は不適な笑みを浮かべた。

「結構好きよ、そういう人」

「ほんとつー?じゃあ仲間になるー!？」

期待を込めて聞いた門珈だったが、

「それは却下」

またしても史弦はあつさり言葉を放つ。

「えー！？何でーー？」

肩を落とす門珈。

仲間第一号の予感だったのにい。

「いーじゃんいーじゃん。一緒に下克上しそひよー」

簡単に言ひじやない、と史弦は苦笑する。

「ていうかね、個人的にはあなたみたいな人好きだけど、組織的に見たら、わたしあなたの敵よ」

「えー！？史弦つてそんなに熱心な鴉団員なのー！？」

「違うわ。わたしにしてみれば鴉も猫もあなたも同じ、排除すべき要素だつてことよ」

予想以上に危険な言葉が出てきて、門珈は目を見張る。

「さ、君意外に極道だねえ」

たじろぐ門珈に、はつー？と眉を潜める史弦。

「ち、違うわつ！例えよ例え！物理的にやるわけないじゃない！」

必死に否定する史弦を見て、門珈は妙に得心した。

「でもさあ、ソラって人は、副会長なのに猫の幹部なんだよね？」

「あら、あなたソラ君のこと知ってるの？」

「うん、寮まで案内してもらつた」

「わたしは一学年の生徒会長。多分この学校で一番平和を望む者じ

やないかしら」「でもだとしたら、史弦は一体何を言いたいんだろう。

門珈の疑問が通じたのか、史弦は溜め息を吐いて説明を加えた。

「わたしは一学年の生徒会長。多分この学校で一番平和を望む者じやないかしら」「えーと、つまり？」

「まだよくわかつていない門珈に、ああもう、と史弦は焦れつたそ
うにする。

「だ、か、らー平和を乱そうとするあなた達に抵抗する立場なの！
本当は！ゼブリのせこい戦略のせいで鴉の位置に収まつてゐるけどね
！」

言つて、はああああと息を吐く。

本当はあたしだつてはじけたいけど、などと小さく呟いてもいた。

「ほえー。君も大変なんだねえ」

そう言つと、史弦はぐつと拳を握り、

「大変なのよー！」

と熱く言つた。

「そういえば今日は、生徒会の副会長と会長コンビに会っているのか。偶然とはいえ、変なかんじだ。」

「へえ。彼は良い人よ。付き合い上猫の幹部なんてやつてるけど、生徒会の活動にも積極的に協力してくれるの」

上機嫌に言つた史弦を、門珈はややげんなりした顔で見つめた。
ああこの人結構見る目ないんだな、と。

ソラが要注意人物だということくらい、さつき初めて会つただけの門珈にもわかるくらいなのに。

「ま、いいや。ねえ、猫の幹部の名前、教えてくれない？」

七組に幹部全てが揃つてゐるといつのだから、名前くらいは頭に入れておきたい。

史弦はいいわよ、と頷き、指折り数えながら言つていく。

「ソラ君でしょ、六日町五十鈴さんでしょ、あと漆・セクレティス
く……」
「「」ほげほつ……！」

咳き込んだ。今日一度目だ。

史弦は不審そうな目でこちらを見つめている。

「う、うるし———？」

「知ってるの？」
我ながら、親の仇のよつた声だったと思つ。

門珈は大きく頷いた。

「うん、知ってるー知ってるだけだけど！」

史弦は不思議そうな顔をしていたが、怪しすぎる門珈の態度に何かを感じたのか、それ以上何も言って来なかつた。

しかしさか漆が幹部だとは思わなかつた。彼も、自分と同じで人の下につくような人間ではないと踏んでいたのだ。
いや、もしかしたら下についておいて影で色々やつているのかもしない。うわ、超有り得る。ずる賢い漆のことだ。傍観者のふりして黒幕だったことは何度もある。
いや、それはまあいいとして。

「おんなじ……クラス……」

門珈は深くうなだれたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2815f/>

猫と鴉

2010年10月9日01時09分発行